

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	8 / 1990 / 8-13
タイトル	庭の生物観察記 ーハシボソガラスの子育てー
著者名	蝦名憲

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

庭の生物観察記

－ハシボソカラスの子育て－

会長 蝦 名 憲

我が家の南側の庭の中ほどに、二抱えほどのケヤキが生えている。この木に4, 5年前からカラスが巣を造るようになった。同じカラスが毎年来ているの



借家人はボソである

かどうか、こどもは巣立ち後どこへいくのかも分からないが、どうせこれからも長く付き合っていくことになるだろうから、目に付いたことを記録してみることにした。

しかし、観察・記録するにしても、先人が観察した資料などモトになるものがなければ何としても心細い。幸いにも青高の小山内孝先生から唐沢孝一著

「カラスはどれほど賢いか」を恵贈されたので、元気が湧いてきた。文中に引用したのはすべてこの資料によった。

【日本で普通に見られるカラスには、くちばしが太くやや澄んだ声でカァーと鳴くハシブトガラス（ブト）と、くちばしが細くやや濁った声でグァーと鳴くハシボソガラス（ボソ）の2種類がいる。】

我が家の借家人はボソの方である。

【ブトの方は南方系で森林を住み家にしてのに対し、ボソの方は北方系で見通しのよい田園地帯を住み家としている】

そう言われてみると、早朝まだ暗いうちに山から市街地に向かって飛んでい

くカラスは、みんなカアカアと爽やかな声で鳴いている。森林を住み家になっている彼等はみんなブトなんだ。

我が家のカラスの住み家としての環境はどうだろうか。安全性について見れば、我が家には彼等にいたずらするような子供はいないし、近所に住んでいるネコ達にはさほど危険を感じていないようで、むしろ遊び相手くらいにしているらしいから問題はないだろう。子育てにあたっては、ここいらを縄張りにしているトビの夫婦と餌を求めて巡回しているはぐれカモメだけを見張っていれば危険なことはないようだ。食料調達場所の確保については、①100メートルほどの近くにある当古寺は、信心深い檀家が多くお墓にあげものの絶えることは滅多にない。②200メートルほどの近くには海があり、漁船から落ちる魚やホタテの詰め替え作業の時に出る海の幸も多いようだ。③庭の角はゴミの集積場になっているので、美味しそうな餌は一番先に頂戴できるといった状況だから申し分ないはずである。④庭にはいろいろな果樹が植わっていて、その時々には十分な量の果実が生産される。こうして見てくると、カラスにしてみればわざわざ遠くまで餌探しに行く必要がない餌つき家つきの場所で、これ以上の環境はほかにはめったにない飛切り上等な場所のようである。



今年は梢近くに巣を造った

去年は木の中ほどの太い股に巣をかけて4羽が孵ったが、巣から出た後も夏の終わり頃までけやきから動かなかった。暑いさなかに餌をねだるギャーギャー鳴き声に悩まされ、ようやくいなくなったと思っても、秋の頃までは巣立ったひなが毎日通勤してきて、果樹の実を食べたり、グラジオラスやユリの根を掘り起こしたり、クルミを拾って屋根の上で転がして遊んだり、好き勝手なことをしながら庭を中心にしての生活していたが、冬になったらやっと見られなくなった。

【縄張を確保し、巣造りを終えたカラスは、産卵、抱卵、育雛、巣立ちと

いった一種の子育てのプログラムをこなしていく。菅沼繁氏（1975）によると、ハシブトガラスの繁殖過程は概ね次のようである。

カラスの繁殖の場合、多少の個体差はあるが、普通、3月中に造巣を終え、4月上旬頃に産卵する。1日1卵ずつ、4～5卵を産む。（中略）

産卵後は、雌親によって約20日抱卵されて孵化する。（中略）

羽毛の生えていない雛は体温維持が不十分なため、さらに2週間にわたり雌親が抱雛する。雛の巣立つのは孵化後、約1ヵ月である。しかし、巣からは巣立ってもおよそ20日くらいは家族群をつくって親鳥の保護のもとに生活し、その後、親の縄張を出て若者衆からなる幼鳥群に仲間入りする。】



巣が完成した

年が変わるとつがいらしい2羽のカラスの姿が見られるようになった。1月の厳しい雪の中でもケヤキの下に生えているイチイの上に頑張っただけで離れようとはしない。巣をかける木をケヤキに決めて、その縄張を必死に守っているように見える。雌親は判別できないが、1羽の方の左の翼の風切羽が1枚抜けている。

2月25日 2羽ともケヤキの先端近くにとまって、細い枝を折る仕草をしている。まもなく巣造りが始まるのだろうか。巣をかける場所を相談しながら下見をしているようだ。そのうちの1羽が羽を少し垂らしてブルブル震わせて、ちょうど雛が餌をねだるような仕草をしている。交尾を促しているのだ。産卵が近くなったのだろう。

2月29日 昨年と違って、梢に近い木の上部に巣を造り始めた。やはり、昨年とは別の夫婦が来ているのか、それとも意識して場所を変えたのか。風が吹けば思い切り揺れるところになぜ？

3月18日 巣が完成した。2、3日前まではがさがさと隙間が目立っていた巣が、今日見るとぎっしりと詰まって内側が見えなくなっていた。所要時間

は約3週間である。夫婦は巢の完成を祝ってどこかで食事しているのだろうか。と見ている間に2羽が連れ添って帰ってきた。抜けていない方がまっすぐ巢に入ってしまったが様子が少し変だ。しゃがんだまま尾をプルプル震わせ、横に開いたり閉じたり、前後に振ったりしている。産卵しているのだ。まもなく産んだ卵を確かめるように見ていたがやがて飛立っていった。すぐには抱卵しないのだろうか。



若葉が繁って、巢立ちが間近になった

3月25日 9時10分風切り羽の抜けた方が帰ってきた。7分で巢から出る。20メートルばかり離れた電線に止まっていたもう一羽の方が翼をプルプル震わせて交尾の合図。電線に止まったまま交尾する。お見事！抜けている方が雄であった。まだ産卵が続いているのだろうか。

3月26日 真面目に抱卵しているのが見える。風あり、時々雪が降る。

3月27日 トビの夫婦が巢の上を旋回し餌を探している。カラスの夫婦が懸命に追払う。その後にはカモメが見舞いに訪れるが、迷惑だととつれなく追い返す。

4月12日 抱擁卵中のカラスは、日に何度餌を摂るのだろうか。鶏であれば喰い溜めがきくから日に1回だけの食事で抱き続けるが、カラスのように飛べる鳥は体重をあまり重くするわけにはいかないから食事の回数が多いはずだ。

この日は13時35分巢から出て、15メートルほど離れた松の枝で糞をしてから餌をついばんでいた。雄があらかじめ運んでおいたのだろうか、場所をどのようにして教えるのだろうか。約5分で巢に戻った。また、17時20分に巢に入るのを見た。これまでの観察から推定すると、1日5～6回は餌を摂っているようだ。

4月15日 3月26日から抱卵したとしても、もうそろそろ孵化する頃だが、事情があつて当分観察できなくなった。

4月29日 親が近づくと、鳴き声が聞えるようになった。

5月13日 木には若葉が茂ってきて巣が見えにくくなってきた。木の葉の間から雛が頭を動かしているように見える。3羽はいるようだ。



5月20日 巣の縁ではばたきの練習をしているのが見える。巣立ちが近くなってきたのだろう。

5月27日 完全に巣から出て北側の枝に止まっている。今年孵ったのは4羽であった。

巣から出て、さかんに翼を動かしている
5月28日 朝起きてみると、ケヤキから20メートルほど離れた柿の木に移動している。近づくとケヤキに飛び戻った。もう完全に飛翔できるようだ。いつの間に練習したのだろうか。

5月29日 今朝は、柿の木からさらに50～60メートル離れた県道の電線に並んで止まっていた。

5月30日 昼間は、親子ともカラスの姿はどこにも見当らなくなった。

【産卵されてから雛が一人前になって親の縄張からでていくまで、約2ヵ月半を要する。巣造りの時期も加えると、子育てには約3ヵ月以上を必要とする。従って、4月上旬に産卵が開始される標準家族では、巣立ちは5月下旬、その後、6月中旬まで親子による家族生活が続くことになる。巣立った雛を守るために親カラスが人を襲ったりするトラブルは、雛が巣立つ5月下旬から6月中旬に集中している】

昨年のカラスとはやはり別の個体であったようだ。巣をかける場所の違いや、巣立ち後のこの庭に対する未練のなさ。個体によってこんなに違うものだろうか。人間の世界に置き換えれば、昨年のカラスは溺愛型であり、親離れ、子離れの教育に失敗した家族であったが、今年の連中は子育てには十分時間をかけたのが、巣立ちにあたっては小気味よく発っていった。

巣から出て、反対側に移動した。
巣離れが近い



ともあれ、巣造りを始める時期はどうして決まるのだろうか。我が家のカラスだけでなくほかの連中も同じ時期に巣の材料を運搬し、また、雄が餌を運んでいるのを見ている。本によると、東京では3月中に造巣を終えて4月上旬頃に産卵するとあるが、今回の観察によれば、その時期が東京の例よりも多少早まっている。これはどうしたことだろうか。

勿論、彼等にカレンダーがあるわけではないので、月日を追ってスケジュールを決めてはいない。が、我々が屋根のなかでの生活に慣れるにしたがって失いつつある四季の移り変わりを感ずる能力が、彼等の行動を調節していることは間違いないだろう。したがって、この時期のずれは、ここ数年続いている異常気象の所為にするのは無理だろうか。ここ数年の観察の結果、毎年例外なくケヤキの葉が鬱蒼と生えて巣が観察できなくなれば、巣立ちの時期が来たことを知ることができるようだ。

巣立ったカラスが無事に成長し、いつかは子育てのために元気でケヤキに来ることを念じながら今回の観察を終えることにした。